

# 『ガイ・ドンヴァイル』

## 登場人物

ガイ・ドンヴァイル

デヴニッシュ卿

フランク・ハンバー

ジョージ・ラウンド（英国海軍大尉）

召使

ペヴァレル夫人

ドンヴァイル夫人

メアリー・ブレイジャー

ファニー

『ガイ・ドンヴァイル』

ヘンリー・ジェイムズ  
水野尚之 訳

婦人帽子屋

第一幕 ポーチーズの庭園

第二幕 リッチモンドのドンヴィル夫人邸

第三幕 ポーチーズの邸内

時代 一七八〇年

## 第一幕

イングランド西部の古い屋敷の庭園。外から人が入りにくい、屋敷の真後ろ。中央近く、台座の上に平らで古風な石版があり、テーブルのように日時計となっている。近くにはベンチがある。下手には低い木戸があり、敷地の別のところにつながっている。上手には高い壁があり、緑色の戸が見える。戸口、ベランダ、短い階段といたった屋敷の背後の部分が見える。六月の午後の終わり近く。木戸からフランク・ハンバー登場。屋敷からフアンニ―登場。

フアンニ― お客様が呼びです！ まあ、失礼しました。ドンヴィル様かと思いましたが。

フランク ドンヴィル君は家の中ではないと？

ファニー そうでございます。ドンヴィル様を見つけに出てまいりましたの。

フランク 彼はあちらの方にはいないよ。僕は馬を小屋につないできたが、自分でやらざるを得なかったんだ。

ファニー 私は獣が怖くありませんから、もしそこにおりましたら馬をおつなぎしましたのに。ピーターは奥様と出かけております。

フランク それで奥様はどこへ出かけられたのですか？

ファニー トーントン<sup>①</sup>までです。古い緑の馬車で。

フランク 古い緑の馬車が憎らしい！ 奥様に会いに五マイルも馬に乗ってきたのに。

ファニー 旦那様はよくそうなさいませぬ！

フランク 来たい回数の半分も来ていない！

ファニー ポーチーズの皆は、旦那様のお望みをよく承知しております！ (共感を込めて) 奥様は旦那様のも

とへ戻ってこられますわ！

フランク まさにそれを願ってここへ来たんだ！

ファニー (笑いながら) まあ、トーントンへ戻ってこれるといふつもりで申しましたが！

フランク きつとそうだろう。馬車がもてば！ それでドンヴィル君に会いたいと言っている人は誰なんです？

ファニー ドンヴィルさんに一番会いたがっておられる方は奥様です！ 奥様は私に、あちこち探させられます。

でも、今はたまたま他の方がドンヴィル様にお会いしたいと。この方です！

(屋敷の中からデヴニッシュユ卿登場。)

フランク この方と二人にしてくれたまえ！

フアニー (デヴニッシュユ卿にお辞儀して) 池の方を探してみます。川の方かも! (緑の戸から退場。)

デヴニッシュユ卿 池や川をさ・ら・う・つ・も・り・な・ん・だ・ら・う・か? 彼が溺れていないといいが!

フランク 僕の友ドンヴィル君は釣りが趣味なんです。

デヴニッシュユ卿 実に罪のない楽しみだ。しかしもつともめり込む楽しみかもしれない! ドンヴィル君はど

うやらないが、彼の友人と知り合えたのは嬉しい。

フランク ではあなたも彼の友人であることを楽しんでおられると?

デヴニッシュユ卿 ぜひそうありたいと思っております! そのためにはるばるロンドンからやってまいりまし

た! ドンヴィル君との用件は急いでおります。急いでおりましたので、彼が呼んでこられるのを落ち着か

なく待っていた今も、一刻も早く彼に会えないかと屋敷から出てきたのです。

フランク ドンヴィル君がポーチーズで生きているとの印象をお持ちになって?

デヴニッシュユ卿 その印象はすでに修正されました。ここに着いてみて、村でのつまましい生活が分かりました。

フランク ドンヴィル君のつまましい生活、パン屋での。

デヴニッシュユ卿 一マイル先でも温かいパンの匂い分かりました! たまたまパン屋の奥さんと出会いました。

僕がこの家のドアを遅れずにノックできたのは、その奥さんが教えてくれたからなんです。

フランク ドンヴィル君はほとんどこの家で過ごしています。

デヴニッシュユ卿 すばらしいところです。一日のほとんどをここで過ごせるなんて!

フランク ここで何をして過ごすかにもよりますが!

デヴニッシュユ卿 僕・の・時・間・は、いつも用事ばかりで。それも特に重要な。

フランク 明らかに生死に関わる用件ですね！

デヴニッシュ卿 僕が些細なことのために昼夜をおかず急いだわけではないということがお分かりでしょう！

パン屋の奥さんからドンヴィル君が寝に帰ることは聞いていました。でも僕の用向きの性質上、ドンヴィル君が眠くなるまで待つことはできませんでした。ドンヴィル君を取り逃がすことは、どうしてもできないのです。

フランク では、あなたがちょうどいい時においになったと申し上げてもいいと思います！ 彼は明日発つのです。

デヴニッシュ卿 (驚いて) どこへですか？

フランク 隠遁するのです。我々カトリック教徒の言い方をすると。

デヴニッシュ卿 (帽子を持ち上げて) 真にして唯一の教会です！

フランク (喜んで) ではあなたも我々の仲間ですね？

デヴニッシュ卿 その群れの中の厄介者です！

フランク ここではその群れは非常に小さいです。しかし我々はイーデンプルック卿に守られています。

デヴニッシュ卿 殿は我々に精神的な滋養を与えてくださいます。

フランク 殿ご自身の教会堂と徳高い司祭様は、我々にとってありがたい慰めです。

デヴニッシュ卿 もちろんあなた方信者の小さな集まりの中心です。ではなぜドンヴィル君はそのような特権を捨てようとするのです？

フランク より大きな特権のためです。宗教者の家に入るためです。

デヴニツシュ卿 聖職につく準備のために？

フランク 彼の叙階の時がついに来たのです。彼は明日の朝ブリストルに発ちます。

デヴニツシュ卿 僕は郵便配達員たちを罵っていました！ ドンヴィル君は船でフランスへ発つのですか？

フランク ドウエーへ、そして彼を育て、僕が行なったのと同じことをしようとした立派な神父たち——天が彼らに報いますように——のところへ！

デヴニツシュ卿 ベネディクト会ですか？ あなた方は彼らの学校に行かれていたのですか？

フランク 一緒にいた時期もありました。でも僕には聖職者にふさわしい素質がありません！

デヴニツシュ卿 そして君はドンヴィル君にこそその素質があると思っておられる？

フランク 僕がといていわけではありません。皆がそう思っているのです。彼にはいわゆる天職があるのです。

デヴニツシュ卿 では僕は来るのが遅すぎたのだろうか？ （緑の戸からファニー再登場）彼を見つけられな

かったんですか？

フランク 水辺では見つけられませんでした。でも乳搾り女が見かけていました。ドンヴィル様は若様と散歩に

出かけておられました。

フランク 若様は生徒様です。

デヴニツシュ卿 ペヴァレル夫人のご息のことですか？

フランク 彼女の唯一の子、可哀そうに父親のいない子です！ イーデンプルック卿の司祭様のご推薦を受けて、

ガイ・ドンヴィルはここ一年その子の先生をしておられます。ファニー、ありがとう。僕たちは待つよ。

（ファニー、屋敷へと退場）

デヴニツシユ卿 あなたのご希望もここにおられることですね。

フランク もちろん。彼にお別れを言うために五マイルも馬に乗ってきたのです。

デヴニツシユ卿 それほどの旧友との親密なご会見においては、僕がいては思慮を欠くというものでしょう。それゆえどうかお願いいたしますが、僕が宿屋で首を長くして彼を待っていると、お伝えいただけませんか？

フランク あなたのお名前を伝えることをお許しただけならば、もっとしつかりお約束できるでしょう。

デヴニツシユ卿 (チョッキの胸から封印のない手紙を取り出して) 僕の名前はここに書いてあります。この手紙には僕の使命の重要さが記されています上、これをぜひ彼の手に渡すように言われております。しかしあなたのお手から受け取った方が、彼は深い関心をいだくでしょう。

フランク (手紙を受け取って) 彼が戻ったらただちに渡します。(木戸を指さしながら) あれが村への近道です。

デヴニツシユ卿 行く前に、もう一つお聞きできますか？ ペヴァレル夫人はサセックスのペヴァレル家の方ですか？

フランク 彼女のかつての夫君は、その一族の方でした。彼女はイーデンプルック卿の姪御様です。

デヴニツシユ卿 実にすばらしいお血筋です！ そして幾分——お歳を召した未亡人であられると？

フランク お歳を召したですって？ 彼女は僕と同じ年ですよ！

デヴニツシユ卿 (笑いながら) まさにお若い盛りですね！ そしてとても魅力的であられると？

フランク ご自分でご判断ください！

(屋敷からペヴァレル夫人登場。デヴニツシュ卿は、帽子を取りながら、夫人が彼の視線を返すとしばらく彼女を見たままでいる。それから堅苦しくお辞儀をし、木戸から出ていく。)

ペヴァレル夫人 (驚いて) あの方のご用は何ですか？

フランク 我々の若い聖職者とお話がしたいそうです。

ペヴァレル夫人 一体どなたです？

フランク この手紙でお分かりになるかと。

ペヴァレル夫人 (手紙を取り) 「ドンヴィル様、デヴニツシュ卿より」

フランク (驚いて) デヴニツシュ卿ですって？

ペヴァレル夫人 (考えながら) それがお名前、お名前ですか？

フランク 大変な信頼に足る貴族のお名前です！

ペヴァレル夫人 それこそ私が申し上げたいことです。ドンヴィル夫人の大いなる崇拜者だと言われた方です。

フランク 夫人の恋人であったとおっしゃるのですか？ ドンヴィル夫人については、我々の善き友の母として

しか知りませんが。

ペヴァレル夫人 彼の親戚、つまり一族の長であった方の未亡人です。

フランク (微笑みながら) 彼は我々一族の長ではありません！ そんな手紙を貰われるなんて！

ペヴァレル夫人 (デヴニツシュ卿の手紙を裏返しながら) お分かりのように、封印がしてありません。(ぼん

やりして) 一体あの方はドンヴィルさんに何のご用なのかしら？

フランク 僕はあの手紙のことを言っているではありません。昨日届いたあなたの手紙のことを言っているの



です。それで僕がやってきたことがお分かりでしょう。

ペヴァレル夫人 あなたはお友達に会いに来られたのではありませんか？

フランク あなたが僕の友人なのです。僕があなたのお宅に伺う時には、いつもあなたこそ僕が会いに来る方なのです！ とりわけあなたがそれを望んでおられると僕にお教えくださる時には。

ペヴァレル夫人（驚いて）私の手紙はそうお伝えしましたか？

フランク その手紙は、同じことになりましたが、僕が伺いたい時にやってきて良いと伝えていました。また他のいくつかについても伝えてあります。もうお忘れになられたのですか？

ペヴァレル夫人 覚えておりません。とても悲しい思いをしていますので。私たちは最良の友を失いつつあるのです。

フランク ああ奥様、僕の最良の友はあなたであり、僕はまだあなたを失っていません！

ペヴァレル夫人 ハンバー様、あなたはまだ私を捉えていません！

フランク では、それがあなたのお手紙の意味ですか？

ペヴァレル夫人 手紙の意味など分かりませんわ！ いつか別の機会に申し上げます！

フランク ありがとうございます。別の機会をお待ちしていますと申し上げます。

ペヴァレル夫人 ゆっくり時間を取りましょう！ 大砂漠のように広がっていますわ！ ひどい損失はジョー

ディーが被るものです。彼は友と、彼の偶像と別れるのです！

フランク あの子はそれほど彼が好きだったのですね？

ペヴァレル夫人 好きだったですって？ あの子は彼にくっついていきます。彼との最後の時を過ごしているので

す！ 私の息子が受けたあれほどの献身、あれほど完璧な愛情、あれほどの影響、あれほどの模範！ そして今すべてが去ろうとしています！

フランク より大きな任務へと！

ペヴァレル夫人 （ぼんやりと肩をすくめ、考えながら）そうです、そうです、より大きな任務へと！

フランク 彼は高い地位へと昇っていくでしょう。高位聖職者へと。

ペヴァレル夫人 彼が「高位聖職者」の一人になるかは分かりませんが、聖者になってもおかしくありません。

フランク （笑いながら）ああ、それこそとむずかしいでしょうね。いろいろなものを捨てなければならぬいでしょうから！

ペヴァレル夫人 （きっぱりと）そうですわ。彼はいろいろなものを捨てるつもりです！ 彼はそれができる人です！

フランク 奥様、あなたの息子様は一人の友を失くされます。しかしもう一人の友はいるのです！ 僕は自分を、

（お宅への関心は別として）ガイほどの友人、ガイほど恩恵を与える人と比べることはできません。僕は賢くないですし、学識もありません。高位に上ることもありませんし、まして聖職者にもなりません！ しかし僕はしっかりと立ち、しっかりと見守ることはできます。息子様の小さな手をこの手で握ることはできません。ペヴァレル様、僕に息子様にとつての大事な存在にならせてください！

ペヴァレル夫人 お好きなだけ善い方におなりください。この家はいつもあなたに開かれています。これ以上の何をお望みなのでしょう？

フランク 僕の望みを、この二年間僕が望んできたことを、あなたはご存じです。あなたのこちら側もあちら側

も拝見しました。しかしあなたにはいつも僕に向けておられない側があります。僕はまだぐるりと一周はしていませんね？

ペヴァレル夫人（微笑みながら）まるで馬の品定めをするようなおっしゃり方ですこと！

フランク あなたが乗っておられるなら、五十頭でも買いますよ！今日は、今お話しした地点に立たせてください！

さい！あなたの愛情とご心配を僕のものにさせてください。あなたの息子様を僕の息子にさせてください！

ペヴァレル夫人（同意するかのように、諦めるかのように）そうですね、あの子はあなたに幾分心を聞きませした。

フランク 彼はお母様にとって良い見本です！

ペヴァレル夫人 それでは息子の美点に留まってください！あの人たちが帰ってきますわ。彼は大変疲れているでしょう。

フランク（微笑みながら）僕とだったら、そんなことを心配する必要はありません！

ペヴァレル夫人 ドンヴィルさんのことをお話ししているのです。

フランク 奥様、僕は自分のことをお話ししています！とうとうお許しくださったのに、それはただまたもや引き延ばされるためだったのですか？ ついにお返事がいただけるという意味でなければ、あなたのお優し

いお言葉は何を意味していたのでしょうか？

ペヴァレル夫人 返事は明日差し上げます。

フランク（ひどく苛立ち）ああ、僕をきちんと扱ってくださいさらない。

ペヴァレル夫人 （この言葉を認めるかのように、なだめる口調で）今夜差し上げます！

フランク どうして今ではだめなのですか？

ペヴァレル夫人 私にこの最後の時間をお与えください！ （そしてまったく違った口調で、無理やり話題を変えようとするように。ポケットから小さな箱を取り出し、包みを取りながら）これをどうお思いになられますか？

フランク （箱を手に取り、嬉しそうに、興味を抱いて）見事な宝石です。沈み彫りですね？

ペヴァレル夫人 父の大事な骨董品でした。トーントンの細工師に印章にさせました。

フランク そしてわざわざ取りに行かれたと？

ペヴァレル夫人 お別れの贈り物にするために。

フランク （当惑して）お別れの、ですか？

ペヴァレル夫人 ドンヴィルさんとのです。

フランク （悲しそうに）ああ！（彼女に箱を返し、向きを変えて）さあ彼がこれを受け取りにやってきました！

（屋敷からガイ・ドンヴィル登場。）

ガイ 思わず遠くへ行ってしまうました。ジョーデーも少し足を引きづっています。たいしたことはありません。靴が合わなかっただけで、朝までに痛みも収まるでしょう。でも僕は彼を寝かしつけ、お母さんに来ていただくようお願いすると彼に言いました。

ペヴァレル夫人 （すばやく）彼のもとへ行きます！

ガイ ここでお待ちします。

(ベヴァレル夫人が屋敷へと退場。)

フランク 君自身が待たれている時に、それはできない。

ガイ 待たれている、と。どなたに？

フランク この手紙を読めば分かる。

ガイ (手紙を持ち、ほんやりと)「デヴニッシュ卿」ですって？

フランク その方は宿屋で長い時間待っておられる。

ガイ (読む)「親愛なる名誉ある親族へ。この手紙は貴君に、我々の高貴な友であり信頼できる使者デヴニッ

シュ卿にふさわしい応対をするよう求めるものである。さらに彼が貴君に語り出すすべてに、貴君の大切な従妹であり忠実なしもべであるマライア・ドンヴィルについて(彼女自身が語るよりもずっと上手に)彼が語ることをすべてについて、辛抱強く耳を傾けてほしいのだ。」(ほんやりと思いつきながら)彼女は、十年前に死んだ従兄弟の未亡人に違いない。

フランク そして彼女の高貴な友人の名高い恋人であると？

ガイ (当惑して)彼の名高い恋人ですって？

フランク (笑いながら)許してくれ、ガイ。君の法衣のことを忘れていた！

ガイ 僕はまだ法衣を着ていません！

フランク その黒い服と控えめな様子からして、君はきっとそうなるだろう。冷たい大学の、ほとんど冷たい回

廊のと言ってよいその雰囲気だ！ デヴニッシュ卿のところに行くことができるね？ 彼は今か今かと待ってお

られる。

ガイ (ためらいながら、手紙をふたたび見る) 「辛抱強く耳を傾けて」ですって？ まずベヴァレル夫人とお

別れしなくてはなりません。

フランク 後にはできないのか？

ガイ 訪問者が僕に命じようとしており、馬車が夜明けに出発しようとしている以上、後にすることはできません。

フランク それでは僕が君の時間を使うことはできない！

ガイ 落ちて着いてください、フランク。僕たちは古い友人です。これからどれだけあなたのことを考えるか、ど

れほどあなたの幸福を願うか、僕に言わせてください。

フランク そう言ってくれるなら、僕が望んでいる幸福のことを覚えているだろうか？

ガイ 覚えていますとも。僕もそれを望んでいます。

フランク 君は心の良さからそう言ってくれる！

ガイ 僕たちの、つまりあなたと僕の昔からの好意から。

フランク 君のお母様がおられた頃のこととも思いつく。君を育て司祭にするとお母様が言われるのを聞いた時の

驚きも。

ガイ 母の清らかな魂が安らかに眠りますように！ あれは誠実な誓いでした！ その誓いは実現したのです！

フランク 僕が誓いを実現するのも手伝ってくれたまえ。君にはできると思う。

ガイ いったって喜んであなたのお手伝いをします。

フランク つまり、今、君が我々の元からいなくなってしまう前にしてほしいのだ。君は何年も行ってしまいうだらう。永遠にかもしれない。

ガイ そうです。永遠にかもしれません！ 僕は自分の人生を捧げたのです。僕は運命を受け入れます。フランク （笑いながら）君はまだ死んだわけじゃない！ しかし我々にとっては、今が君の最期の時だ。

ガイ 僕の最期の時！ 僕の最期の時なのですね！ それでは僕は、とても有意義に使わなくてはなりません。フランク、どのようにお助けしたらよいのでしょうか？

フランク 私のために弁じてほしいんだ。私を信じてくださいと彼女に言っていたきたい。彼女は君のことを本当に大切に思っているから。

ガイ 彼女は僕たちの聖なる教会を慕っています。

フランク 私が言いたいのはまさにそれなのだ。君の考えは他の人々の考えと同じではない。君の言葉は他の人々の言葉とは違うのだ。君の言葉に従うのはある程度彼女の義務なのだ。だから君こそまさに僕の思いを伝えられる人なんだ。

ガイ （少しして）彼女に非常に優しくしてくださいますか？

フランク 天に誓って約束する。

ガイ 優しくしない男もいます。そして彼女は、彼女は善良さそのものなのです！

フランク ああ、彼女がどういう人か私には分かっている！

ガイ それでは彼女に忠実で優しく誠実にしてくださいますか？

フランク ああ君、私は彼女が踏む地面を崇めるよ！ それに私には立派な地所と古い名前がある。

ガイ (少しして) 僕はあなたの思いを伝えます。

フランク それでは、これからお願いします！

(ペヴァレル夫人、再登場)

ペヴァレル夫人 子供はただ疲れているだけでした。でも目を大きく見開いています。あなたをまた抱きしめた

いと言っています！

ガイ 抱きしめられに行きましょう！

ペヴァレル夫人 今は待つてください。もつとおとなしくなるでしょう。(ハンバーに向って) ずいぶん遠くま

で馬でこられましたから、お飲み物を差し上げましょう。ホワイト・パーラーに用意させました。

フランク ドンヴィルの昇進を祝していただきに行きましょう！ (屋敷へと退場)

ガイ 彼はあなたのお踏みになる地面を崇めています。そしてあなたに優しくすると天に誓いました。

ペヴァレル夫人 (微笑んで) 私にそう言うように、彼があなたに頼んだのですか？

ガイ そして彼には立派な地所と古い名前があります。

ペヴァレル夫人 あなたのお名前ほど古くはありませんわ。あなたのはこの国で最古のお名前のうちの一つです

もの！

ガイ ああ、僕は自分の名前を捨てようとしています！ 別の名前を持つのです！

ペヴァレル夫人 ドンヴィル様、あなたには天職があります。

ガイ 僕は機会をつかみました。それをしっかり見据えて生きてきました。怖くはありません。安楽の諦め、明

確な義務、教会の務め、神の賛美……こうしたことが僕を待っているように思えます！ そしていたるとこ



ろに助けるべき人がいます。

ペヴァレル夫人 もしあなたが私を助けてくださったように人をお助けになるなら、あなたは大変な慰めをお与えになるでしょう！

ガイ 僕は慰めを得ました。あなたのお屋敷にて僕は、唯一の途、もつとも深い必要を見つけましたから。僕はここで自分の真の姿を学び、真ではない姿も学びました。たった今も、お子様とあちこち歩いた時、様々な瞬間、様々な思い出が蘇ってきました。僕は僕たちが、つまりあなたと僕がこれまで歩いたすべてのところにお子様をお連れしました。僕はお母様のことを驚くほどお子様に話しました。

ペヴァレル夫人 私も我が子におられなくなった先生のことを話しましょう。

ガイ 僕のことを時々フランク・ハンバーとお話してください！

ペヴァレル夫人 (突然、脈絡なく、石の上の手紙を見ながら) デヴニッシュ卿とはどなたですか？

ガイ (驚いて) それを知りに行かねば！

ペヴァレル夫人 そのお手紙では分かりませんか？

ガイ お読みになってくださいれば、お分かりになります。

ペヴァレル夫人 読みませんわ！

ガイ 彼は奥様にきつと優しくしてくれるでしょう。

ペヴァレル夫人 どなたのことをおっしゃっているのですか？

ガイ フランク・ハンバーのことです。彼はあなたを助けてくれるでしょう。守ってくれるでしょう。大事にしてくれるでしょう。彼を幸せにしてあげてください。

ペヴァレル夫人 ずいぶん簡単におっしゃること！

ガイ 彼と結婚してください！

ペヴァレル夫人 ドンヴィルさん、どうしてあなたが結婚のことをおっしゃるのですか？

ガイ その仕事の最初の規律が、その生活の厳格な規則が、結婚を慎むことであるこの私が、ですか？ 僕は世慣れた人として結婚のことを言っているわけではありません。聖職者として言っているのです。我々の母なる教会が結婚を命じる場合があります。我々は母なる教会に頭を垂れなければなりません。（屋敷へと退場する）

ペヴァレル夫人 （一人になり）母なる教会に頭を垂れなければ、ですって？ 私は地面にまで垂れていないで

しょうか？ （落ち着きなく、神経質に、テーブルの上の開いた手紙にもう一度目を向ける。そして意を決して手紙を取り上げ、立って読む。その間にデヴニッシュ卿が木戸から再び現れ、気づかれずに夫人を見ている。デヴニッシュ卿再登場。）急いでおられますのね。

デヴニッシュ卿 （微笑みながら手紙を指さす。）奥様、あなたほどではありません！

ペヴァレル夫人 ドンヴィルさんの許しを得てですが。

デヴニッシュ卿 私が戻ってきた理由もほとんど同じです。私のこの上ない心配のことです！ この場から離れようとした際にあなたにお会いでき、その時に私の心配が生まれたのです。それからいろいろと考えさせられました。それによって私は宿屋に戻れなくなると正直に申し上げてもいいと思います。私は持ち場を離れられなくなりました！

ペヴァレル夫人 おっしゃることが分かりません。

デヴニツシュ卿 おそらくお分かりになるでしょう。ドンヴィル君が分かった時にですが！

ペヴァレル夫人 彼をあなたのところに来させ、あなた様を喜ばせるように命じましょう！（屋敷へと退場）

デヴニツシュ卿 魅力的な女性の存在ほど喜ばしいものはない！もし彼が夫人に手紙を渡していたら、彼女こそ私が推察していたような気がした人、つまり彼が秘密を打ち明ける相談相手だ。その場合、矛盾の匂いがある！

（屋敷からガイ・ドンヴィル登場）しかしこの若者なら一度や二度の困難もやむを得ない！

ガイ あなたのところへお伺いするところでした。

デヴニツシュ卿 君に会いに遠くからやって来ましたので、もう二、三歩歩いてもいいと思っていました。もちろん私の訪問は、理由があつてのことです。

ガイ 僕へのお客様は実に少ないのです！

デヴニツシュ卿 たくさんの人の賛辞を受けるのは君の役目なんだ！

ガイ 僕の役目がどんなに少ないか、おそらくあなたはご存じなのです！

デヴニツシュ卿 いや、まったくその逆です。ちゃんと知っていたからこそ私が自らここへ来たのです。それもこれほど早く。君がご自分で確かめられたように、私の信任状は私の用向きの重要さを示しています。

ガイ ドンヴィル夫人は僕に予期せぬ名誉を与えてくださいます。

デヴニツシュ卿 君が私に与えてくれる名誉ほどではないよ、もし君が私にもっとも注意を払ってくれたらだが、どうか掛けてください。まず君に、君のもっとも近い唯一の親戚ゲイのドンヴィル氏の死去をお伝えするという悲しい義務を果たさなければなりません。馬が彼の首を折ったのです。彼は馬に乗れないほど酔っていました！

ガイ 彼にもっとためになる最期を望みたかったです！

デヴニツシュ卿 彼にはもっとすばらしい人生を、もう少し後継者の少ないことを望んでもよかったです！

彼は一度も結婚しませんでした。

ガイ (驚いて) しかし彼には子供がいたと？

デヴニツシュ卿 その子たちは語るに値しません！

ガイ しかし確かに同情するに値します！

デヴニツシュ卿 財産を失うことについてですか？

ガイ (一層驚いて) 彼らは財産を失うのですか？

デヴニツシュ卿 ゲイの古い屋敷は縮小し、荷を負わされています。しかしノルマン人の征服<sup>③</sup>以来そこに建ち、

君の一族の手から離れていないのです。

ガイ しかし亡くなったドンヴィル氏の子供たちが僕の一族であるとしたら？

デヴニツシュ卿 (あきれて) 彼ら、村のころつき連中がですか？

ガイ (驚いて) しかし他に誰もいないとしたら？

デヴニツシュ卿 もし他に誰もいないとしたら、ドンヴィル君、(痛そうに腰をさすって) 私はここが痛くなる

まで急いでこなかったでしょう！ 君ご自身が、君の一族なのです。

ガイ (夢から覚めたように) 僕が？

デヴニツシュ卿 君が次の後継者です。君がゲイの主人なのです。

ガイ (茫然として) 僕がですか？

デヴニツシュ卿 一族の世継ぎであり、君のお名前の最期の人です。

ガイ (茫然として) 僕にとっては、そんなことはおとぎ話です！

デヴニツシュ卿 それこそまさに私がお伝えしてきたことです。他の人からこの話を聞かせる訳にはいきません  
でした！

ガイ 僕は自分の任務を選びました。明日それを受け取りに出かけます。

デヴニツシュ卿 私の訪問の目的は、君に出発させないことです。君の義務はもつと近くにありますが、君が着けている名前に対する義務が先です。君の人生は、君だけが放棄できるものではありません。それは君の立場、君の名誉、君の一族に属するものです。

ガイ (静かに、きつぱりと) 僕は聖職者になるべく育てられました。

デヴニツシュ卿 君はドンヴィル家の一員にならないようには育てられなかった、と思いますが！

ガイ ドンヴィル家の分家の中では、常に教会へ捧げられてきました。僕が覚えている限り遡っても、教会はその捧げものを受け取っています。それを取り戻すには遅すぎます。

デヴニツシュ卿 遅すぎるだつて？ 数時間のことですよ！ 君の冷淡さは私に、君の清らかな性格にとっては

禁じられたふさわしくないイメージがあるように思わせる！ それゆえお願いですから、一瞬だけ途切れる性格もあると思わせてください。(笑いながら) 君の激しさはペヴァレル夫人のせいですか？

ガイ (驚き、かすかに怒りながら) ペヴァレル夫人は僕のもつとも優しい友人です。彼女は僕の信仰の生活をよしとされています。

デヴニツシュ卿 そしてそれを示す彼女のやり方は、君をプリストルへと急がせることだったと？

ガイ 夫人は僕を「急がせる」ことなどされていません。夫人は僕を毎日引き止めさえされてきました。

デヴニッシュ卿 (心を打たれ、そつげなく) ああ！ その引き止めに感謝します！

ガイ ご存じのように、それは僕の生徒のためです。

デヴニッシュ卿 君の生徒に感謝します！ 君の生徒と生徒のお母様は、も・う・一・つ・の・生・活・の・可・能・性・を・君・の・目・に・開

かせませんでしたか？ つまり君の名前が君に場所を与える男と女の世界の、自然で自由で心地よい生活で

す。ドンヴィル夫人のために君にその問いを投げかけているのです。

ガイ ドンヴィル夫人の問いは、彼女が会ったことのない人に対する驚くべき礼儀ですね。

(注)

- ① トーントン——Taunton イングランド南西部Somerset州の町。Jeffrey判事の「血の巡回裁判」(一六八五年)の地。
- ② ドゥエー——Douai フランス北部Lilleの南にある市。十六、十七世紀にはイングランドから追放されたカトリック教徒の間で政治的・宗教的中心をなした。
- ③ ノルマン人の征服——the Conquest ノルマンディー公国のウイリアムによるイングランド征服とノルマン朝の創始。一〇六六年。